総評

報告者はこれまで複数の国際共同制作に関わってきたが、最終的な作品があらゆる文脈を持った観客に対して伝わり、受け入れられることが国際共同制作作品の一つの評価指標であると考えている。今回の作品はフランスと日本で活動するパスカル・ランベールと平田オリザの二人の長年の友情に基づいて発案されたものだが、お互いの国をからかい合うようなセリフが作品の中に書き込まれることで、現代日本社会における新たな視点がもたらされている。このような作り手の目論見は、パスカルと信頼関係を有す俳優・スタッフ陣の努力により、それぞれの国の独自性を超えた普遍性を獲得するに至ったと高く評価できる。とりわけコロナ禍における国際共同制作でありながら、次々に起こる新たな課題に一つずつ向き合ってクリエーションが順調に進んだことは驚くべきことであり、国際共同制作の一つのモデルケースとして共有されるべきものだろう。残念ながら一般の観客の目に触れる機会は逃してしまったが、しばしの間の冷凍保存を経て、近い将来この作品が日本フランスのみならず多くの国々で早く世に出ることを願ってやまない。

公演チラシとスケジュール

インタビュー1：平野暁人

――今回の翻訳はどれくらいの期間で行われたのでしょうか。

平野　最初の粗訳は1か月で行いました。その後しばらく寝かせてから推敲して、推敲したものをオリザさんに渡して、オリザさんから戻ってきたものをまた直したので、3〜4か月にわたって適宜直していました。

――7月の第1次稽古の際には毎日稽古場にいらっしゃいましたよね。パスカルさんはZoomで参加していましたが、平野さんはZoomを使ったクリエーションはあまり経験のないことでしたか。

平野　いえ、2020年の後半にSPAC（静岡県舞台芸術センター）で関わった作品[5]もZoomで行われて、今はもうZoom職人のようになっています（笑）。

――パスカルさんとはメールでのやりとりに加えてZoomでのやりとりでしたが、例えば『愛のおわり』のときと比べてやりづらさはありましたか。

平野　むしろ今までで一番やりやすかったかもしれません。これまでは翻訳と通訳を両方担当していたところ、今回は初めて翻訳に専念したので単純に比較できないところはありますが。パスカルと最初に仕事をしたのは10年以上前でしたが、そのときと比べると彼もかなり優しくなって、愛に溢れているように思います。リハーサルでも毎日「みんなと稽古できるのが幸せだよ」と話していましたが、10年前のパスカルだったら、今回のように全てを受け入れてくれなかったかもしれません。いい人であることに変わりはないですが。

――平野さんはこれまでに国際共同制作に多く関わってきた中で、翻訳者として一番やりがいや達成感を感じるときはどのようなときですか。

平野　私自身がこれはよく翻訳できたと思うセリフを俳優がよく言ってくれたときですね。

――今回はいかがでしたか？

平野　そのようなセリフばかりでした。それにははっきりした理由があって、今回『KOTATSU』に出演した俳優は、青年団の中でも特別よく知っている方ばかりでした。初めてご一緒したのは淺村カミーラさんだけだと思います。ですので、訳している段階からセリフがみんなの声で聞こえてくるんです。俳優の演技の仕方もわかっているので、翻訳が自然とその人に近い口調になっていきます。特に兵藤公美さんの痛快なセリフなどは、こういうテンポでいきたいという明確なプランが自分の中にあって翻訳しましたが、それをご本人が言ってくれたときのはまり具合には思わずニヤニヤしてしまいました。

――パスカルさん、オリザさん、平野さんの3名での共同作業はいかがでしたか。

平野　今回は極めてうまくいきました。そういう意味でも全員にとって達成感があったのではないかと思います。オリザさんは『愛のおわり』のときも日本語監修という形で関わっていましたが、長いモノローグでできている作品だったので平田オリザの戯曲とは対極の作風でした。その中でもポイントごとにしっくりくる表現を見つけてくれて、その象徴が今回の作品に直接つながった「こたつでみかん」でしたが、キーフレーズやキーワードへの関わりが主で、全体としてオリザさんの手はあまり入っていませんでした。ところが今回はパスカルがオリザさんのことを強く意識して書いた戯曲だったので、日本が舞台で日本人が出演することに加えて、相槌や短いセリフ、沈黙などが戯曲に書き込まれていました。このことで、オリザさんにとってはパスカルの戯曲に平田イズムを加える余地ができたと言えます。短いセリフを入れようとする余地があるほどに、オリザさんにとってパスカルの戯曲が成功していたということですね。パスカルにとってもオリザさんの手が入ることで、共同制作という実感がより湧いたと思います。私の立場から言うと、これはオリザさん本人にも言ったことですが、オリザさんが後から加筆できるように翻訳することを心がけました。いわゆる翻訳文体、翻訳口調であれば後から加筆することは難しかったと思いますが、私はそれぞれの役者の話し方を計算して訳したので、そこにオリザさんがすんなり加筆してくれたことは翻訳が成功していたと言えるのではないかと思います。

――オリザさんのセリフが加わった上演を実際にご覧になってどのような印象を持ちましたか。

平野　細かなセリフが増えていましたね。私が良かれと思って入れた接続詞や終助詞が取られているところもありましたが、オリザさんが日本語監修ですので全く文句はありません。仮にその言葉を取ったらニュアンスがなくなってしまうということがあれば、相手がどなたであれ意見をしますが、今回はそのようなストレスが全くなかったです。

――今回素晴らしいプロダクションが実現できた背景には、しっかりとした制作体制が取られていたことが大きいように感じます。平野さんが色々な現場を経験される中で、今回の制作体制について感じたことはありますか。

平野　青年団は1999年から国際交流事業でフランス公演を行ったり、フランスから演出家を招聘していますが、パスカルはその最初期から関わっていて平田オリザと例外的に深い関係を築くことに成功した人です。パスカルとオリザさんの二者関係を中心にしながら、制作の西尾祥子さん、今回もテクニカルで中心的な存在だった西本彩さん、舞台監督の播間愛子さんなど核を成すスタッフたちはパスカル馴染みの人たちで、彼と一緒にやることを心得ています。きっとパスカルはこうしたいだろうから、ここはこうしておこうというようなことがわかっているし、逆にパスカルも自分に必要なことは聞いてくるだろうから、聞いてこないことはいちいちうるさく言わなくていいという関係ができています。このようなパスカル組で取り組むことができたからこそ、スムーズに進んだのではないかと思います。

――これまでの信頼関係が結実していますね。プロジェクト全体を振り返ってみて、ここが大変だったなというところはありましたか。

平野　お忙しい方なので仕方ないですが、オリザさんからの翻訳の戻しが遅かったときは焦りました。オリザさんが確認した後に私も再度推敲するのですが、もしオリザさんの修正が元のフランス語と大きく乖離しているところがあれば軌道修正をしなくてはいけないので、その時間を取る必要があります。俳優の方の負担にならないよう早く戻したい気持ちがあるのですが、オリザさんからの戻しが届いたのは第1次稽古の約1週間前だったと思います。完全に予測の範囲内でもあったんですが……。

――最後に今回のような国際共同制作プロジェクトにおいて、翻訳者・通訳者としてここを改善していった方がいいということがあれば教えていただけますか。

平野　青年団は問題ないのですが、いつの時期にどれくらいの対価が支払われるのかという条件の提示が曖昧なことがあります。最近では若い団体や若いプロデューサーほどその意識は強くなっているので、明らかに改善はしています。あとはクレジットの問題ですね。いつも私のクレジットが示されるとは限らず、広報物に自分の名前がなかったり、例えばトークのときに通訳者として紹介されなかったりすると、ぬるっとした感じで始まってやりづらいので、このような問題はいつも気にしています。あとはトークや取材などの関連企画は実施が決まってから教えてもらうことが多いのですが、例えばその内容がフランス側から2名参加、日本側から6名参加だったりすると、それをどのように1名の通訳で回すのかという問題があり、決まる前に一度相談してほしいと思っています。そうすればこちらから通訳は2名必要だと提言したり、予算的に1名しか無理な場合には時間を短くしたり、事前に話す内容を共有したりすることで次善の策を協議することができますので。

――国際共同制作に欠かすことのできない存在である翻訳者・通訳者の方のお話を伺えて大変有意義な時間でした。

インタビュー2：パスカル・ランベール（2回目）

――7月のアゴラ劇場での稽古と8月の江原河畔劇場での稽古を何回か拝見したので、今回Zoomで稽古されたことを知っていますが、それを知らない人がこの作品を見たらリモートで稽古したとは信じられないほどの完成度だと思いました。作品が出来上がってみて、感じていることがあれば教えてください。

パスカル　戯曲を書いた時点から半年または1年後にならないと出来上がりが見られないというのが私の仕事の良い点でもあり、悪い点でもありますが、今回は想像していたものと非常に近い状態になっています。

――5月にお話を伺ったときは、7月も東京に来て稽古をする計画でしたが、今日に至るまで色々なことがあったと思います。クリエーションのプロセスを振り返っていただいて、ここは危なかったなと感じたことはありますか。

パスカル　全く心配はなく、不安もありませんでした。コロナ禍は既に19〜20か月にわたって続いていますがこの間も私が関わっている国際的な制作作品は全て実現してきました。それがなぜできているかというと、全ての作品にしっかりした制作体制があるからです。今回もまさにその一つで、青年団も国際交流基金がしっかりサポートしてくださいました。世の中には大変だと嘆きたい人たちが多いですが、私は全くそういう感じでなく、本当にやるべきことをやれば大丈夫であると感じています。

――今回ほどZoomを用いて稽古を行ったのはパスカルさんにとって初めてのことでしたか。

パスカル　7月の第1次稽古の頃には既に別の作品でエストニアのタリンと香港でZoomでの稽古の準備をしていました。私は映画の仕事もしていますが、そのときは映像モニターを通して俳優の動きを確認しているわけです。それを考えればZoomでの稽古もそれほど問題にはならない状況だと感じています。状況が大変なときに、人々は大げさに嘆きがちですが、私は何か困ったことがあったら解決方法を見つけることが好きです。問題があればあるほど、色々考えて解決方法を見つけていくことができるのである意味うれしいんです。私は35か国で演出していますが、フランス語圏以外では言葉にあまり頼れないところがあるので、耳で聞いて演出しているので、Zoomでの稽古の問題点はありませんでした。ただ今回は皆さんマスクをされていて、役者の顔がはっきり見えないことがつらかったです。

――5月にインタビューした際に、パスカルさんにとって国際共同制作を作っていく上で大事なことは友情であるというお話をされていました。今回はまさに青年団、そして平田オリザさんとの友情で作られた作品だと思いますが、特に今回は共同演出という形で深く関わられたオリザさんとの共同作業はいかがでしたか。

パスカル　私たち二人には、共に現実主義者であるという共通点があります。これまで私は20年来日本にお邪魔して、10作品ほどの演出をしてきました。今回の作品の題材は日本のお正月ですが、戯曲の執筆にあたってお正月の様々な側面について勉強しました。日本での1月1日というのが何であるか、そのときに何を食べるのか、どういったしきたりがあるのかなど、色々調べて執筆しましたが、やはり最終的に厳密なところでは、私自身が日本のお正月について正確に語りきれないことを認識しています。そこで今回オリザさんには、まるで絵画を完成させるような形で、私が95〜98%書いた後の最終的な仕上げをしていただきました。オリザさんの仕上げによって、描かれている人物の顔が完成するというような形での協力でした。これまでの私の人生で、このような協力は全く初めてのことでしたし、オリザさん以外の方とはきっと無理だろうと思います。これは私たちが言語、言葉というものに対する同じ愛を持って取り組んでいることが理由だと思います。そしてお互いを認め合っている関係だからこそ実現しています。

――国際的なコラボレーションには色んな作品がありますが、今回のパスカルさんと青年団、オリザさんとの共同作業はその理想形に近いものではないかと拝見して思いました。日本には劇団という仕組みがありますが、今回青年団という同じ劇団に所属している俳優と仕事をされた中で感じたことがあ

れば教えてください。

パスカル　長い期間一緒に作品作りをされている方たちであることが大きな点だと思います。例えば、宏と健司が二人で対話する最後のシーン（第21場）を例に取りますと、私はあの場面を書いたときに既にお二人が長く一緒に作品作りをしてきた仲であることを知っています。ですので、単純に二人の人間が話し合うというふうな書き方をしました。これは世の中にあり得る、最も単純でそして人間らしい状況です。また今回の出演者の中で、公美さん、友里さん、宏さん、愛さん、一生さんは既に他の作品でご一緒したことのある俳優たちですが、これは何にも代えがたいことです。私はフランスでも20年来、30年来の付き合いの俳優たちと仕事をしますし、スペイン、イタリア、中国、南米、アメリカでも20年前に別の作品でご一緒した方たちとまた作品を作ることをよくしています。今回特にうれしかったことは、2007年に『愛のはじまり』でご一緒した荻野友里さんと久しぶりに仕事をして、彼女の成長ぶり、成熟ぶりが見られたことでした。このように俳優たちに寄り添って道を一緒に歩むことが私はとても好きなんです。それによって私自身も糧を得られますし、互いに寄り添うことによって時間も私たちに寄り添ってくれます。

――コロナ禍の終わりがまだ見えない中で、今回のような形での国際共同制作は今後も続いていくと思われますが、やはり実際にその場で稽古をしないとできないこともあると思います。例えばZoomのモニターを介してできないことの一つに照明作りがあると思いますが、成果発表を拝見して例えば第20場の宏と友里の二人のシーンは非常に暗い中ですが美しい場面で、リモートでこのような演出が可能なのかと感激しました。今回の稽古のプロセスを経て、その場での稽古でしかできないことについてのお考えがあれば教えてください。

パスカル　私は40年間演劇の仕事をしています。肉体的にも精神的にも演劇が自分の人生です。私の故郷であるフランス南部では、身体の触れ合う関係が自然ですので、毎日俳優とハグをしてから稽古を始めるというのが基本になっています。そのような私ですので、Zoomでの稽古は地獄であり、基本的に反対である、というのがこれまでの基本的な立場でした。しかし今回のクリエーションを通してZoomで作品作りができること、そして今ご質問いただいた照明についても作ることができることを認めざるを得なくなってしまいました。7月の第1次稽古にZoomで参加していたときは、演出はここまで来たけれども、やはり照明を作るのは無理だろうと思っていました。ですが照明の西本彩さんとは過去18年間一緒に作品作りをしてきましたので、彼女は私がどういうものが好きで、何を欲しているのかというのを話す必要がないくらいわかってくれています。私も彼女のことを全面的に信頼して一緒に作品を作ることができました。今回の作品は照明の度合いを見ると複雑な作品になっているのですが、それは西本さんに助けられた部分が多く、実際に劇場で照明を見たときに自分がZoomの画面を通して考えていたものと非常に近いことを確認できました。これは稽古のときにも話していたことですが、きっと3〜5年後にはZoomを介して作品作りができるようになって、それが普通になっていくのではないかと思います。飛行機に乗る必要がなくなり、地球環境にとっては良いことなのではないかと思います。直接会えなくなることはもちろん残念なんですが、きっとそうなっていくのではないでしょうか。

インタビューの模様（劇場2階の稽古場にて）

――今回のように全てのプロセスをZoomで行うことは大変なことだと思いますが、今後国際的なプロジェクトの演出にあたって、例えばその一部をZoomを使ってはどうかという提案があったときにはどのようにお考えになりますか。

パスカル　そのような提案をいただいた場合は、きっと乗るだろうと思います。実際まもなくニューヨークでの作品が2つ予定されているのですが、そのうちの一つの稽古が12月に始まることになっていてビザなど色々複雑な手続きがあるため、第1期の稽古はおそらくZoomで行うことになりそうです。アメリカには日本のような隔離期間がありませんので、第2期の稽古からはニューヨークで行う形になると思います。一般的に考えると、Zoomを用いたリハーサルは制作的にも費用が抑えられるので取り入れられていくのではないでしょうか。とはいえ、まだ経験の浅い若手の演出家にとって、Zoomでの稽古はそう簡単なことではないかもしれません。今回の場合は私がよく知っている日本という国での作品作りで、青年団と平田オリザさんをはじめ、お迎えいただいた体制が素晴らしく、皆さんがそれぞれの役割を完璧に担われていたからこそできたことだと思います。とはいえ、私は体制が完璧なところでないと仕事は引き受けないんですけれども。

――先ほど今回の共同作業は理想に近いと申し上げましたが、私が考えるその一つの理由は、今回の作品は日本とフランスというパスカルさんがよく知られている国同士の友情に基づいて、しかしお互いにちょっとからかってみるようなセリフが作品の中に書き込まれることで、新しい視点をもたらしていることがあります。作り手がこのような狙いを考えることと、それを今回の作品のように実現できているということの間には大きなギャップがあり、それが成立していることが素晴らしいと感じました。

パスカル　私の作品作りの歴史を考えたときに重要な国が3つあり、それはアメリカ、日本、そしてエジプトをはじめとする中東です。私はジュヌヴィリエ劇場にいたとき、オリザさんを何度もお呼びする中で日本との関係が深くなっていきました。今回の『KOTATSU』という作品は私にとって本当に作りたいものでした。そしてこれは人生で初めて思うことですが、今はその続編を作りたいと考えています。今思い描いているのは、『KOTATSU』三部作です。4〜5年後くらいに第二部を、そして10〜12年後に第三部を、今回の第一部と同じ舞台美術で、今回の俳優たちにも出演してもらいたいと考えています。そしてもう一つ、平田オリザさんとのプロジェクトを考えています。私たちは二人とも1962年生まれですが、共に90歳になる2052年に一緒の作品を作ろうというものです。二人とも小さなテーブルに向かって座っていて、オリザさんが日本語で話し私がフランス語で話します。舞台上には字幕が出て、舞台は空舞台、私の作品でよくあるような蛍光灯の照明で照らされています。自分の生まれたときからお互いの人生が交差するところを語っていくという形で、ジュヌヴィリエ劇場のことや私が日本に来たときのこと、お互いに長男が生まれたときとか、そういったようなことをそれぞれ日本語とフランス語で話そうかなと思っています。まあ20年後のことですけれども。

――90歳というと、30年後ですか？

ああ30年後でした！ そうですね。ああよかった、30年後です。ぜひそのときにはまた国際交流基金のお力添えをいただきたいと思います。

――『KOTATSU』三部作もぜひ見てみたいです。

パスカル　今回の作品の中には別の題材へと展開させていけるようなポイントがいくつもあります。また今回の舞台空間には色々な用途に使える可能性があります。例えば空間に棺を置いて、色んな人が花を持ってくることで第二部には通夜のような場面が考えられます。また第三部では結婚式が行われた後に少し静かなひと時で近親者として家族だけが集まっているというような場面も想像しています。今回の舞台美術は私が構想していたものが完璧に実現されている素晴らしい空間で、この中ではなんでもできるというような空間になっています。

――先ほどお互いの国のイメージを少しずつ変えていくという話をしましたが、今回の舞台装置もその一つだと思います。日本人の私からすると、日本の家だなと思うときもあれば、いやこれは実際には日本にはないではないかと感じるときもあり、本当に美しいですね。

パスカル　ありがとうございます。私自身も日本では本当にこういうふうにするのだろうかと何度も問いかけて疑問を抱きながら今回の作品を作りました。とはいえ、やはり演劇というのは全てを正確に再現することではないと思います。形を作る上でも、ストーリーを語る上でも、戯曲の執筆や演出を通して、ある種必要なズレを作っていく作業だと考えています。そして横堀さんが言った通り、この作品の中では、フランスのことを時々ちょっと笑ったり、日本のことをちょっと笑ったりしていますけれども、それは私自身がこの20年間実際に感じてきたことを反映したものです。なので、ある意味自分の真実を伝えている部分でもあるんです。自分が日本に対して抱いてきたこと、そして日本の方がフランスに対して思われていることでいつも自分は面白いなと聞いたり見たりしているところを反映しています。

――オリザさんとパスカルさんはお二人とも現実主義者だというお話がありましたが、今回のクリエーションを拝見してパスカルさんは与えられた条件の中での解決法の導き出し方が非常に優れていると感じました。ですが一方で例えば、初めから条件がもう少しこうなっていたら、もっと良いものができるのにと感じたことはあるでしょうか。これまで35か国で40年にわたってお仕事をされてきた中で、他の国と比較してみて日本のやり方がもっとこうだったらいいのにとか、日本とフランスの共同制作をもっと良いものにしていく上で何か考えがあれば教えてください。

パスカル　私がこれ以上日本に望むものはありません。日本は仕事をする上で本当に気持ちのいいところです。私が今まで作品作りでご一緒している各国のパートナーは皆さん本当に質の高い仕事をされる方ばかりです。その中でも日本は、万全の体制を作ってくださいます。よく色々な国で話題にするのは「あ、今日本から連絡があったんだけど、2年後の作品のことで、いつどういうふうに稽古するかっていう問い合わせなんだよ」というエピソードを紹介してみんなで笑っています。一方で例えば中国のように1時間後にどういう状況になるかわからないような国もあるわけですが、日本のように事前に入念に準備することは非常に私の性に合っています。年間10作品の新作を抱えて、それが8〜10か国での作品である私にとって、やはり事前に準備をすることは必要なことなので。また日本の方が真面目に現実主義的に物事を進めるというところも私と合っています。ですので、私の方から提案することは何もありません。今はこの作品をぜひ日本国内外でツアーできたらというのが一番の願いです。ヨーロッパ、フランス、特にパリでこの作品が観られないことはあってはいけないことだと思います。パリの人たちを想定して作ったわけではないのですが、作品を観ていると改めて絶対パリの人が大好きな要素ばかりが詰まっている作品であると感じています。

――良い国際共同制作作品はあらゆる文脈を持った観客に対しても伝わって受け入れられるものだと考えていますが、今回の『KOTATSU』第一部はまさにそういう作品だと感じました。早くこの作品を日本の観客にも観てもらいたいですし、フランスの観客にも観てもらいたいです。ツアー公演の早い実現を期待しております。

パスカル　私もです。今回はありがとうございました。このオブザーバーというお仕事を繊細に気を遣って行っていただき私たちも仕事がしやすかったです。1年後、2年後にまたお会いできたらうれしいです。

インタビュー・文：横堀応彦
通訳：石川裕美

＊平野とのインタビューは2021年9月18日18時から18時30分までZoomにて実施し、パスカルとのインタビューは2021年9月9日16時30分から17時30分まで江原河畔劇場2階稽古場にて実施した。

1 https://toyooka-theaterfestival.jp/program-event/221/
2 https://toyooka-theaterfestival.jp/important-notice/
3 当初は芸術文化観光専門職大学の学生が観劇予定だったが、直前になって学内で感染者が出たことにより、学生の観劇は取りやめとなった。
4 本報告書は第3回と第4回の2回分にあたるが、内容が連続しているため2回分をあわせて1本の報告書とした。「クリエーションについて」「作品について」「平野暁人 インタビュー」が第3回に該当し、「総評」「パスカル・ランベール インタビュー」が第4回に該当する。
5 https://spac.or.jp/au2020-sp2021/yokainokuni_2020